政所茶新聞

発行
政所茶レン茶”ー

滋賀県立大学
近江楽座
活動報告新聞

政所茶レン〝茶ー〟とは

政所茶レン茶ーは滋賀県東近江市奥永源寺政所町の耕作放棄地の茶畑を活用し、地域の方に指導をいただきながら、無農薬で政所茶の栽培を行っています。また彦根市内の飲食店やマルシェ等での販売も行っております。年間を通して畑の管理をしており、活動を通して政所を知り、政所を楽しむために活動しています。また、政所茶レン茶ーは販売などの場で PR 活動を行うことで、地域活性化につなげていくことを目指している団体です。

新パッケージ登場！

今年はこれまでの高級感あふれるパッケージを一新し、選抜メンバーによって新しいパッケージが作成された。テーマは、おしゃれで手に取ってみたくなるようなパッケージ。茶葉のパッケージは歴史を感じるものが多く、若い世代が手に取りにくいものが多いように思われる。そんなイメージを払拭し、若者世代も親しみの持てるパッケージを目指した。

パッケージ刷新の結果、特に対面販売の時に、「かわいい」や「おしゃれ」などの嬉しいお言葉をいただいた。また、購買者層もこれまで40代以上の方が多かったが、若い世代や子育て世代の方にも手に取っていただく機会が増えた。

ティーパック番茶

今年の夏にはかねてから計画していた政所番茶のティーパックの商品化が実現した。地が頃の若い世代の家には急須がないことがほとんどである。そのため、茶葉のままでの販売では手が出しにくいという状況があった。

ティーパックを作ったことにより政所茶に興味を持ってくれた若い世代が、「これならうちの家でも飲める」と喜んでもらえた。

コロナとの闘い

昨年度に引き続き、コロナの状況を見つつの活動となった。畑で作業を行うときは、常に手袋を着用、こまめに手洗いを行うようにした。また、これまでは一か所から順に作業を行うようにしていたが、広がって間隔を取りながらさぎょうをおこなうようにした。作業中は熱中症の危険もあるため、適宜マスクを外したが、発声する際や移動中などは常に着用するようにした。また、食事をする際も飲食店を離床するのではなく、河川敷で広がって食事をとるようにした。

地域の声

鈴鹿山中にある政所地域まで山道を通って通うのは決して楽なことではないと思います。また、お茶作りという自然相手の活動で、天候に左右されながら学業の合間を縫って時間を作り、次の年に引き継いでいる事は、派手さはないものの素晴らしい成果だと思います。今年度はコロナ禍で地域活動が制限され思うように活動ができない中、こまめに畑に通い、ここ数年の中ではかなり管理の行き届いた茶畑の状態を維持してくれていたと思います。

山形蓮さん

活動の振り返り

今年度の活動では、本当に多くの方に支援していただいたように感じました。新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりイベント出店が難しいことも多かったですが、これまで活動でお世話になってきた方々からお声がけをいただき販売の機会を得たり、購入していただくことが本当に多かったです。販売機会の獲得は今後の課題として残りますが、このような縁を大切に活動していきたいと思います。

県大ラジオ部

発行
県大ラジオ部

滋賀県立大学
近江楽座
活動報告新聞

県大ラジオ部とは

県大ラジオ部は「地域と大学をつなげるラジオ番組」をモットーに今年度発足し活動を開始しました。滋賀県彦根市の銀座商店街を中心に活動しています。現在エフエム彦根での番組放送が主な活動になっています。毎週月曜日に一回十五分の番組を日に算会放送しています。主なコーナーは、『県大ZINE LIFE』と『まち☆スター』の二つです。この定期放送に加えて銀座街での公開放送を行いました。

今年度から活動開始

2020 年度の後期授業「地域デザインD」の後進として今年度から県大ラジオ部が発足しました。前期のプロジェクトに採択され、活動が開始されました。活動を始めた前期では、コロナ禍での活動ということでリモートでの取材や部員同士の交流が減少するなどの困難を極めましたが、活動を続けていく中で徐々に活動に参加する人が増えていき、FM放送で流してもらえるまでになりました。

コロナ禍でもインタビュー練習やワークショップなどの活動に力を入れ、制限された環境下でも部員一同精一杯力を尽くすことができました。来年度も県大ラジオ部の活動が認められ、地域と大学の橋渡しになるような活動をやって行きたいです。

銀座街での公開放送

2020 年 11/20 11/21 彦根の銀座街でえびす講が開催され、県大ラジオ部は太田書店隣の貸しブースで公開放送をおこなった。公開放送という形式での放送をするのは初めてだったので緊張していたが、楽しい時間を持つことができた。

たくさんの人が足を止めて放送を聞いてくれて県大ラジオ部の存在を地域の人に知ってもらうことができた。

エフエムひこねで放送開始

2022 年の 1 月に地域のコミュニティFM「エフエムひこね」での放送が開始されました。第一回目のゲストは株式会社いろあわせの北川さんでした。エフエムひこねでの放送は毎週月曜日の 9 時 15 分、13 時、16 時 15 分の一回十五分の算会放送で今のところはすべて収録放送です。今後彦根銀座街での公開収録やエフエムひこねのスタジオでの生放送にもチャレンジしていきたいと考えていますので乞うご期待！

収録の様子

地域の声

今ではシャッターが目立つようになってしまった銀座街を地元の県立大学の学生さん達に活動の場として選んで頂けたことを嬉しく思います。人と地域を繋ぐ交流や情報の発信をテーマに掲げ、商店街の各店舗への取材などを通して今まで見えていなかったことが少し可視化され今までなかった新しい商店街 のカタチも見せて頂けました。

今回は限られた期間の中での活動でしたが、どんなカタチであれこういった活動が途切れず継続されればいいと思います。

六月の水曜日 店主 宇野 爵さん

活動の振り返り

コロナの影響でなかなか活動ができない日々が続きましたが、そのなかでも自分達にできることは何か模索し続けた一年間でした。FM 放送やワークショップなどの活動や、取材で出会った人たちとの縁を大切にしこれからも活動を続けていきたいです。

発行日　2022年3月31日

近江楽座

とよさと快蔵プロジェクト

夏の改修作業

豊郷町吉田にある空き家の改修事業である。「たく庵」という名前は近隣の「おむすび」という改修物件に添えられる物件として、命名された。

まちづくり委員会から、豊郷町吉田にありプロジェクトの普段の活動拠点にも近い築100年を超えるこの空き家の改修依頼を受けた。そこで10人ほどの有志のメンバーが改修案を考えた結果、広い庭を持つこの敷地を活用するため、プロジェクトメンバーや町の人が作業をしたり、子供が自由に遊んだりできる町に開けたオープンスペースを作ることに決定した。案の決定後はネーミングコンペを経て「たく庵」という名前がつけられ、8月から夏改修が始まった。

例年は豊郷町に宿泊しながらの作業だが、今年は日帰りでの作業形式を選択した。またコロナウイルスの影響で当初の予定のうちの後半の活動ができなくなり、計18日の作業予定が8日間の作業となった。さらに人数制限を設け作業場所を分けたため、例年に比べ作業効率が悪くなる恐れがあったが、作業よりもメンバーの安全・楽しさを優先することに決め、活動を行った。

時間の制限があった夏の期間には、草刈りや小道作りなどの庭整備、屋内の清掃と床・天井はがし、馬や堆肥ボックスなど必要道具の製作など、当初の計画の半分程度しかできなかったが、引き続き作業を続け今年度末までに外構の整備が終了した。またメンバーと楽しく安全に活動をするという目標を達成できたのでよかった。

【写真】たく庵屋外（上）と屋内（下）の解体の様子

個展「快蔵のおすそわけ」

豊郷町の古民家4棟を使い、プロジェクトメンバーがそれぞれの個性を表現した作品の展示を行った。他にも古民家に眠っていた食器や帯・建具を効果的に飾ったり、古着のリメイクなどの活動紹介をしたりと、幅広い分野での展示を行った。

コロナ禍において改修活動が思うように進まない可能性があったので、各自で準備ができ、イベント当日も密になる可能性が低い展示会の形式でのイベント開催を計画した。また去年1年を通して町のイベントが激減し、町の人とのつながりが希薄になってしまったため、この展示会を町の人に見てもらうことでプロジェクトの活動やメンバーそれぞれの個性を知ってもらおうという試みである。

作品の出展者17人を含む有志の33人のメンバーを募り、企画・運営を行った。準備段階として個々が作品をつくり、会場となる物件の整備や展示棚、照明などの設営をした。また広報においてはSNSの投稿やポスターの展示、小学校や役場へのDMの広告などで集客を行った。初めての試みだったが、町民やOB,OGの方に助けられ、無事成功することができた。

町内の方を中心に、17日間の開催期間の中で合計50人の方に足を運んでもらうことができた。メンバーの中で出たアイデアや「やりたい」という気持ちを形として実現できたのがよかった。実際に形にしていく中でさまざまな人に助けていただき繋がりを作ることができた。また改修だけでなくさまざまなことを行っているのだという感想もいただけたため、快蔵プロジェクトのことをより知ってもらえたと感じた。

【写真】4つの古民家での展示の様子
（上）建具と食器を使った作品「灯笥」
尾崎梨帆・佐々木絢子
（中）風に揺れる写真の効果的な展示
「寝ても醒めても」
川崎恵李・藤森明音・今西希月
（下）着物の帯を使った作品「Kimono&Obi」
坂上晴穂・枡田智花・七里純平ほか

とよさと快蔵プロジェクトとは

滋賀県の豊郷町内にある空き家や空き蔵を地域資産として捉え、学生なりの視点から付加価値を見出し、活用している。改修だけにとどまらず、地域イベントの参加やバーの運営など幅広い活動を通して町の方と共に町を盛り上げている。私たちが活動の拠点としている滋賀県一小さな町には空き家や空き蔵が点在している。

私たちはこうした町の負の遺産に着目して、学生なりの発想で価値を見出し、地域を盛り上げる活動を行ってきた。17年間の活動を経て、プロジェクトが広く町の人に認知され町内で活動する学生団体として受け入れられた。NPO法人とよさとまちづくり委員会や豊郷町役場をはじめとするこれまで培ってきた多くのネットワークを活用し、より広い範囲で様々な団体との情報交換の場を設け、そのスキルをこの町に還元する町を盛り上げる町の人をサポートするという学生としての理想的な立場をとりながら、将来的に住民が町について考えるという姿勢を定着させるということを目的として活動する。

私たちはこれまで14軒の物件を改修してきた。改修するだけでなく、それらを利用することで初めて古民家を活用できていると言えると考える。改修した物件でバーの運営をしたりイベントを企画・開催したりと、地域や他団体などに向けてとよさと快蔵プロジェクトの活動・改修物件を発信している。

全体を改修、企画、タルタルーガ、広報の4つの部門に分けそれぞれが責任を持って事業を行うことで、幅広い活動も組織的に運営することができている。

地域の声

まずはとよさと快蔵プロジェクトの日頃の活動とそれをお支え頂いている滋賀県立大学と滋賀県に感謝申し上げます。

このコロナ禍の2年間、多くの規制で活動制限される中で、豊郷町に大きな影響を与え続けてくれている学生の皆さんは、ギリギリの活動を続けてくれました。

特に、まちづくり委員会、豊郷町観光協会、吉田区を始め、各地区の事業の運営には欠かせない存在になっています。またここ数年、活動してくれたOB OGが、このまちに残り、仕事としての活躍ぶりがまちの原動力になっています。この流れは、高齢化に入ったこのまちや元の住民に対しての活性化に繋がり大きなうねりにも感じています。OB OGと共に現役学生の活動は、コロナ禍収束後、地域力が重要な時代に、永年関わり地域を知って活動を続けて来た結果、大きなずれが無く、即戦力として結果が出ると期待しています。無くてはならない皆さんと共に、今後も小さなまち豊郷町をよろしくお願い致します。今年もありがとうございました。

とよさとまちづくり委員会　　岡村博之

今年の活動を振り返って

今年一年の活動を振り返り、コロナ禍という状況下にかかわらず多くの活動ができたことを成果として実感しました。またそれと同時に、まちの人とのコミュニケーションをとることの難しさを課題として感じました。

今年度、私たちはコロナ禍における活動体制を見直し、安全に活動ができる体制を模索しました。新しい企画を考案したり、工夫して作業したりするなどして、実際に多くの活動を行うことができました。

しかし地域に入って改修やイベントは行うものの、まちの人と直接的に関わることはあまりありませんでした。まちを歩いている際にたまたまの人に声をかけられ会話し、作業していることやイベントをしていることは認知されていましたが、どんな人たちが何のためにやっているのかまではなかなか伝わっていない様子でした。メンバーの入れ替わりが激しいという学生の性質や、コロナ禍で活動がストップしてしまい町と関わることのできるイベントが激減してしまったこと、快蔵プロジェクトと町をつなぐ人が引退しいなくなってしまったことなども原因の一つとして挙げられます。しかし私たちの活動は町と密接に関わっており町の人の協力なしでは行えません。

過去の活動を振り返ってみると、イベントなどでメンバーとまちの人が仲良くなっている様子が数多く見受けられましたが、現在ではプロジェクト発足時にはあったはずの町との関係性が薄れています。時が過ぎるごとにまちの人たちの求めるものは変わっているはずなのに私たちの行動は10数年特に大きな変化をしていません。このままでは私たちがまちに寄り添うことなく独り歩きしていくようになる可能性もあります。このことから、地域に入る学生団体はプロジェクトを引き継いでいくことの重要性よりもまちの人との関わりを引き継いでいけるような在り方を目指すべきであるように感じます。コミュニケーションを密に取り、まちの人に対等な立場として意見をもらえるようになって初めてこのとよさと快蔵プロジェクトが成り立つのではないかとこの1年間で感じました。

BAMBOO HOUSE PROJECT

発行日：2022年3月31日

この写真は、1月の週末WSで新たに制作された「竹線景」である。

どんな活動？

・BAMBOO HOUSE PROJECTとは

全国的に問題となっている日本の放置竹林、ここ滋賀県湖南市の放置竹林もまた、同じ問題を抱えていた。鬱蒼とした竹林は不法投棄のゴミで溢れ、やがて近隣の住宅街にまで竹が侵入し、地域住民の悩みの種になっていた。そこで、菩提寺まちづくり協議会から当指導教員の陶器浩一教授のもとにこの竹林をこどもたちが集まる場所に依頼があった。

こうして、2012年から「バンブーハウスプロジェクト」が始動した。当初は湖南市の助成制度である「きらめき湖南」の中に組み込まれ、3年計画であった。プロジェクトの目的は、竹林整備を通して、地域住民が触れ合える空間や機会をつくることである。この2012年～2015年の3年間の間に、菩提寺竹林の全体計画を行い、地域の人々が交流できる場を整えた。よって、今では荒れ果てた竹林が放課後にこどもたちが遊びにきたり、近所の親子が散歩しにきたり、公園のような場所になった。春にはたけのこ掘りのイベントが行われるようになった。

しかし、竹林は毎年の定期的な伐採と公園のメンテナンスが必要不可欠であり、地域交流という点からも長期的なスパンで今後も関わっていくことが望ましいと考えられる。また、今までの活動が菩提寺の甲西北中学校に認められ、中学校の総合学習の時間をお借りして、共同で竹林整備を行えるようになった。地域と大学での竹林整備のサイクルと地域交流の継続的なあり方を模索できたらと考える。

変わり続ける「竹の庭」～新築と解体・再構築～

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により例年通りの活動を行うことが難しく、思うように活動ができなかった。しかし、このプロジェクトは、継続した活動が重要であるため、そのような状況の中でも例年通りできることは感染症対策を徹底しながら活動をし、例年通り行えないことは、来年度に向けてできることを最大限行った。

バンブーハウス2号の老朽化により、性急に補修作業を行わなければならない緊急性の高い状況であったため、今年度の週末WSは泊まり込みでの作業となった。作業中には、消毒・マスクの着用や時間ごとの検温など、施設では常時換気・広い部屋を使用しソーシャルディスタンスの確保など感染症対策を徹底し、また、その旨をまちの方々に伝え協議し、賛同していただいた上で、11月12月は例年通り宿泊を伴う週末WSを行い、無事作業を終えることができた。

例年行っている甲西北中学校との合同竹林整備や環境学習講話など昨年度同様に感染状況を考慮し断念することになったが、来年度に向けて一度、校長先生・教頭先生に改めて挨拶に伺うなど、受け継いできた地域との関わりを終わらせないよう引き継いでいけるようにしていきたい。

また、「竹の庭」に関して、竹の生え変わり周期と呼ばれている8年も過ぎ、バンブーハウスは生きた竹を躯体としているため、躯体が枯れる可能性も高くプロジェクト発足当初に制作された竹建築の老朽化が酷く、バンブーハウス2号は象徴化することで人が入ることのできないようにするなど、今後、他の竹建築をどのタイミングで補修、解体し再構築するのか地域の方々と共有しながら検討し「竹の庭」全体の姿をどのように変化させていくかを改めて計画する必要がある。これからも竹建築の姿・形は変わっていくが、モノが変化しても場所としてはいい環境を残していきたいと考えている。

この「竹の庭」が地域の人々に愛され、地域に寄り添ってこの場が続いていくように、これからも継続して活動を行いたい。

地域×子ども×学生　地域に愛される為に

～地域の子どもとの交流～

今年で9年目となるこの活動であるが、9年経った今でも「竹の庭」は地域に愛されている場所であると改めて感じた。

今年度の「竹の庭」での活動中何度も近くに住む小学生が遊びに来てくれた。話をきくと「竹の庭」には毎日のように遊びに来ているとのことで、大変嬉しく思た。

かつてバンブーハウス1号があった場所に新しくハンモックを制作していると、「今度は何が出来るの？」と興味津々に活動を見学し、出来上がったハンモックには一番に乗って遊んでいた。

活動当初のころを知らない小学生の子どもたちが、私たち学生が代々受け継ぎ、解体・再構築を繰り返してきたこの「竹の庭」を遊び場として愛してくれていることは、9年もの間途絶えることなく活動してきた意味があると感じた。そしてこれからも地域に愛される場所であり続けるために活動を続けていきたい。

地域への貢献

今年度の活動での大きな出来事としては、「竹の庭」すぐ横の個人の所有地である竹林の持ち主から、ぜひうちの竹林も整備してほしいとの依頼を受け、滋賀県立大学の学生とまちづくり協議会の方々で竹林整備を行ったことである。「竹の庭」の竹林外での活動、竹林整備の依頼は初めてのことであった。これまで継続して活動してきて、少しずつでも地域の人たちに私たちの活動を知ってもらい、活動を認められた結果であると感じる。これに引き続き、「竹の庭」以外の竹林での活動も行い、地域に貢献していけるよう継続して活動を行っていきたい。

地域の方からの声

平成24年度から提寺まちづくり協議会が借用して管理しています菩提区の竹林に、滋賀県立大学の皆様と共同で始めたバンブーハウスプロジェクトも今年で9年が過ぎようとしています。

今期も、新型コロナウイルスの影響で、制約が多かった事と思いますが、毎年継続してプロジェクトを運営されている代表の方のご苦労に、感謝している所です。

バンブーハウスプロジェクト皆さんも、思うような活動が出来ない年になったかと思いますが、皆さんのご協力で施設の維持管理が出来ております。今期は解体した1号機後にハンモックの新設、2号機も補修してオブジェとして残してもらいました。スクリーンデッキの補修と、ブランコを新しく付け替えていただき、子どもたちが喜んでいます。

甲西北中学校との環境学習が2年間出来ていませんが、今年は出来るように中学校とのパイプ役に成れるように行いたいと思います。

12月のWSの時に菩提寺区の区長が竹林を見学されました。今期は竹林の管理外（個人の所有地）の竹も伐採してほしいと言う依頼が有り、委員会と共同で伐採を行いました。長年に渡りこのプロジェクトを行い、竹林を綺麗に整備してもらい感謝されております。今後ともよろしくお願いします。

ほぼ毎日の事と思いますが、地元の子どもたちが、竹林に遊びに来ています。休みの日には、家族で遊びに来ている所をよく見かけます。地域活性化委員会のメンバーでの心残りは、毎年学生の皆さんと12月ご苦労さん会を行っているのですが、今年もする機会がなく、残念に思っています。これからも皆様のご協力よろしくお願いします。

菩提寺まちづくり協議会　地域活性化委員会委員長　浅井基義

フラワーエネルギー「なの・わり」

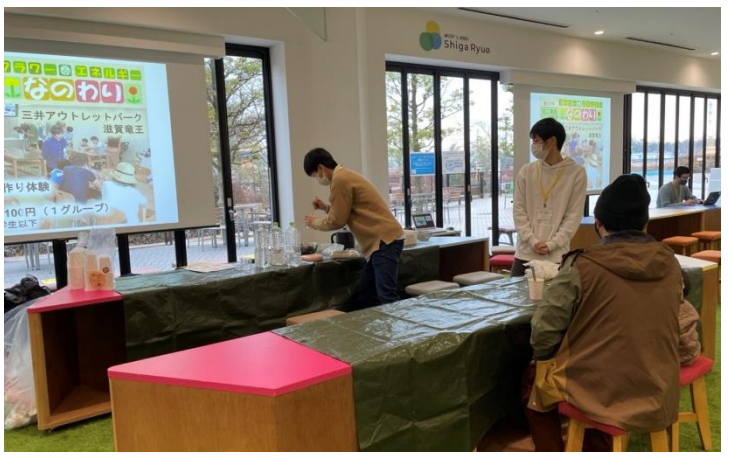
チームのビッグニュース

二年ぶり！子供向けイベントへの参加

二〇二一年八月十三日に長浜市のヤンマーミュージアムで、科学実験教室としてスライム・スーパーボール作り体験を行った。この取り組みは、子供たちに科学への興味を持ってもらうことを目的とし、地域貢献活動の一環として開催している。昨年度はコロナで開催されなかったが、今年は万全のコロナ対策の下、多くの子供たちと触れ合うことができた。

また翌年三月一日には、三井アウトレットパーク滋賀竜王でも同様のイベントを開催した。当日は子供たちにスライム作りを楽しんでもらいつつ、保護者の方へは、なの・わりの宣伝活動を行った。また、「ラメ入りスライムにしてはどうか？」や土日祝での開催を提案されるなど、温かいご意見もいただいた。今後、参加くださった親子の皆さんが、科学や環境問題について興味を持っていただければ幸いである。

▲ヤンマーミュージアムにて、スライム作り体験中のお子さん



▲アウトレットでのイベントの様子

地域の声

学生の皆さんが立ち入ってくれたおかげで町内が明るく活気づき、作付けすることで景観もよくなることができました。」

「当初より、約十五年余り変わらず今日に至っています。長い間学生さんもなれない作業でしたがご苦労様でした。」

プロジェクト紹介

▲今年度のひまわりの開花

フラワーエネルギー「なの・わり」は、植物を使った資源循環型社会の形成を目指したプロジェクトである。主な活動は、菜の花、ひまわりを栽培し、収穫した種からバイオディーゼル燃料を作っている。また、この取り組みや環境問題を小～高校生に知ってもらうために、出前授業や高大連携授業を行っている。また、科学の楽しさを体感してもらうイベントを各地で開催している。出前授業の依頼も募集しているので、ぜひブログにコメントを。

新規プロジェクト

一昨年で学外の畑作業は一端幕を下ろしたが、二〇二一年秋から地域の方のご協力の下、新たに彦根市石寺町で学外畑を整備することができた。畑面積は十アールで、学内畑の約十倍の規模である。現在は菜の花の芽が出た程度であるが、春にかけて大きく育ってくれることを期待している。

▲学外畑、整備の様子

一方、学内畑では、ひまわりを二年ぶりに栽培、種の収穫に成功した。ただ、秋以降、菜の花の栽培も試みたが、冬の大雪により ほとんどの株が圧死してしまった。今春は工学部棟内で、菜の花が咲き誇る様子が見れないのは、非常に残念である。

成果と課題

今年度の成果は、昨年コロナでできなかった学外イベント、高大連携授業の開催、成功があげられる。

課題として、広報活動が不十分で、小学校への出前授業ができなかった点、新規部員を多く集めれなかった点があげられる。

March 31, 2022

AKARINCHU　NEWS

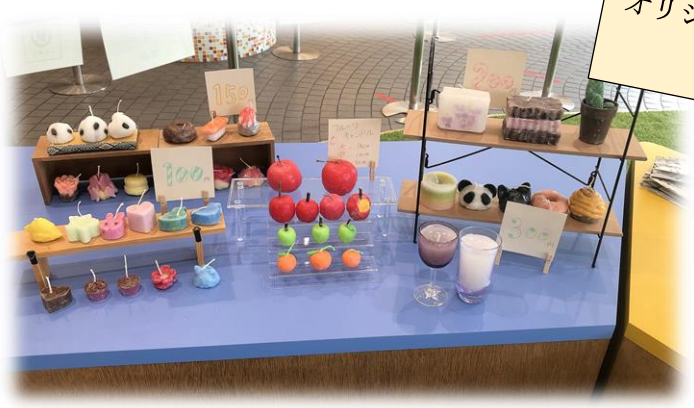
あかりんちゅとは

あかりんちゅとは、寺社などからやむなく廃棄されてしまう蝋燭、通称「残ろう」を回収・再利用し、手作りキャンドルの販売、キャンドルナイト・キャンドル作り教室の開催を行っている。モットーは「エコでスローな夜を。」

Blumen Hugel Candle Night

8 月 8 日に滋賀県蒲生郡日野町にある「滋賀農業公園ブルーメの丘」にてキャンドルナイトを行いました。夏休みであったため、13 時頃にメンバーが集まり、キャンドルの設置を開始しました。ブルーメの丘のスタッフさんにも手伝っていただきながら、約 3,500 個ものキャンドルを設置していき、19 時に点火をしました。この日はとても天気が良く風で火が消えることもなかったため、キャンドルナイトにはうってつけの日でした。色とりどりのグラスを使い、道に沿って並べたり、花や星の形を作ったりしました。ブルーメの丘で美しく咲いている花たちとキャンドルの灯りによって華やかで温かい空間が生み出され、見に来てくださった方からも綺麗だという感想をいただきました。

様々なイベントを実施！



オリジナルキャンドルの販売

製作体験会

あかりんちゅ自慢

あかりんちゅの自慢といえば大きく言えば 3 つあります。

まずは S プロジェクトであること。基本的にはイベントを行った際の依頼料と販売の売上金で活動しています。

二つ目は県内外、どこへでも行って活動できること。材料は自分たちが全部持っていくため、体験教室は平らなところとコンセントが 1 つあれば活動できます。このため、様々な人との交流の機会があります。

3 つ目は様々な団体との関わりがあること。近江楽座の団体からキャンドルナイト用のロウソクを作ってくださる福祉団体のジョブカレさん、残ろうを集めてくださる滋賀教区浄土宗青年会さんなど、2 つ目に挙げた特性上、様々な人と関わって活動していける団体です。

感染症対策

コロナ禍に合わせて体験教室の形式をお客さん同士の接触が起こらないものに変更しました。キャンドルも見やすいように棚を買い、見栄えする配置になるようにしました。

近江楽座
ボランティアサークル

Harmony

チームのビッグニュース

ぴかっ to アート展にて作品入賞

令和三年十二月三日から十二月十二日にかけて展示が行われた「第十一回ぴかっ to アート展」においてメロディ活動の作品二点がそれぞれ大賞と審査員特別賞を受賞しました。

このアート展は主に障害のある方の社会参加や障害への理解を目的として、毎年滋賀県内で障がいのある方の造形作品を広く募っています。昨年に引き続きイオンモール草津で開催されました。今年は平面作品二四八点、立体作品七十一点の応募がありました。

その中から藤本湊也さんの「魅惑のバターナッツかぼちゃ」が大賞を受賞し、矢野輝さんの「母の日『ありがとう』」が審査員特別賞を受賞しました。本作品は、ハーモニーの定例活動とNPO法人障害者の就労と余暇を考える会メロディーの活動の中で製作されたものです。

藤本湊也さんの作品「魅惑バターナッツかぼちゃ」は、かぼちゃと同系色の背景を用いることで背景に溶け込むような静かで神秘的な表現がなされており、優しい気持ちを感じさせる作品になっているとの高い評価を審査員の方からいただきました。

矢野輝さんの作品「母の日『ありがとう』」は母の日のキーカラーとなる赤い色を多く使い、母への言葉にできない大きな感謝の気持ちを、抽象画として表現しています。キャンバス上の筆の動きひとつひとつが、感謝の気持ちとなり作品を見る人の心にも伝わってきます。

令和二年十二月十二日には受賞作品の表彰式が行われました。毎月行われる定例会議でもこの快挙をメロディとハーモニー共に祝いました。

受賞式の様子
左：矢野輝さん
右：藤本湊也さん

ちょっと聞いてよ！ プロジェクト自慢

ハーモニー学習会

令和三年四月二十四日と五月二十二日にハーモニー学習会が行われました。ハーモニー学習会ではハーモニーとメロディーの立ち上げやこれまでの活動について学習します。コロナ禍のため二回とも Zoom にてオンラインで開催されました。

今年度はメロディーの活動に携わっておられる養護学校の先生方や、障がいを持つ子の親御さんのお話を聞かせていただいたほか、卒業生の活躍も知ることができました。長年子供たちに寄り添ってきたからこそ気づける視点や、卒業生の今までの活動など貴重な体験談から多くの学びを得ました。ハーモニーでは定例活動だけでなくこのようなお話からも障がいのある方への理解を深めることができます。

プロジェクト紹介

創作とイベントで深まる交流

定例活動
油絵・粘土製作
手伝い
お茶体験

イベント
クリスマスコンサート
冬のお泊まり会
バス旅行

その他
定例会議
受賞報告会

ハーモニーの活動の中心は障がい者の油絵・粘土制作のお手伝いです。毎月、土曜日の十二時半から十六時半まで行なっています。作品制作の後に抹茶とお菓子をいただくお茶体験を行なっていましたが、現在はコロナ禍の影響で中止となりました。

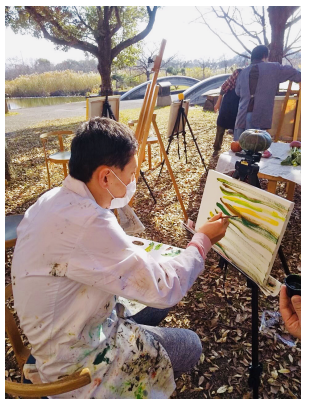
定例活動以外にもクリスマスコンサートなどのイベントを行なっています。今年度は令和三年十二月十八日から、十二月二十五日まYoutube での配信を行いました。アカペラサークルの TRI TONE と吹奏楽部が出演して多くの方にご覧いただきました。

コロナ禍だからこそできることを

一年の活動を通した成果と課題

今年度も昨年に引き続きコロナ禍での活動となりました。定例会議やクリスマスコンサートなどはオンラインで行いましたがオンラインだからこそ参加しやすい面もあり、有意義な時間にできました。

一方で定例活動は感染拡大だけでなく大雪の影響もあり、中止にせざる得ない時がありました。現在感染がますます広がる中、ハーモニーとしてどのような活動ができるか来年度からも模索しながら進めていきたいと考えています。



定例活動の様子

地域の声

メロディー　西澤真志さん

コロナ禍で思うように集まって話し合ったり、活動したりするのが難しい中で、ハーモニーのみなさんはいつも前向きに考え、取り組んでくれています。

ハーモニーのみなさんは、ZOOMやSNSなどを使いこなし、一緒に活動しているメロディーのメンバーは「すごいなあ」「さすが若いし、何でもできるね」と感心しきりです。会議はオンラインですが充実した話し合いができ、離れていても顔を見て活動の計画や準備をすることができました。２年連続のオンライン開催となったコンサートでは、吹奏楽部やアカペラサークルにも協力いただき、クリスマスの雰囲気たっぷりの楽しい時間を各家庭で過ごすことができました。

今年度は、感染状況の落ち着いた時期をみて、油絵や粘土を創作する定例活動を６回開催することができました。キャンバスや絵の具など、事前に準備していてくださったおかげで、活動が始まると参加者のみんながイキイキと創作することができました。これまでに活動で描いた作品が、今年度の「ぴかっ to アート展」で大賞と審査員特別賞を受賞することができました。何年も前から先輩たちがコツコツと積み上げてきた活動を、ハーモニーのみなさんがしっかりと引き継ぎ、大変な世の中にも関わらず途絶えることなく支え続けてくださったおかげです。感謝しています。

これからも一緒に楽しい活動を作っていきましょう。

― 発刊日　2022年3月31日―

活動報告新聞

チームのビッグニュース

未来看護塾の今年のビッグニュースは、ビバシティ彦根でのイベントである「応援！生き活き健康生活」を開催できたことである。昨年は新型コロナウイルスの影響で開催できなかったが、今年度は無事開催することができたのだ。非常に喜ばしいことである。今回のイベントでは、ビバシティ彦根のイベント会場を借りて、ハンドケア、血圧測定、ちびっ子広場、身長・体脂肪測定、健康クイズなどのブースを企画し、ステージではハンドベル演奏や体操を行った。左の写真を見て欲しい。これは市民の皆さんと学生が一緒になって体操をしている写真である。楽しんで体操に参加してくださった。嬉しい光景である。他にも、ちびっ子広場での子ども達の笑顔や、「勉強になりました」「これから気を付けますね」といった、企画に参加してくださった方からのありがたいお言葉は、私たちにとってやりがいにつながった。そして、なんと驚いたことに、このイベントをNTVの方に取材していただいたのである。このイベントは未来看護塾をたくさんの人に知ってもらう良い機会となった。

プロジェクト紹介

未来看護塾は滋賀県彦根市を中心に地域住民との関わりを重視しながら身体的、精神的健康を援助する活動をしている。また私たちの活動目標はSDGsの目標である「すべての人々に健康を」と重なっていると考えられ、滋賀県立大学のSDGsの活動にも関わらせていただいている。また活動を通じて自身の看護観を磨くということもこの団体の目標である。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を考慮して、学内イベント、NPO法人ぽぽハウス、城南小学校の(保健室)でのボランティア活動、ビバシティ彦根での健康支援活動を行った。例年は、彦根市立病院、もりのこけんだいまえ保育園、でのボランティア活動、湖風祭での児童向けイベントの企画と運営、地域住民に向けた簡易的な健康チェック、宮城県南三陸町での被災者支援、地域のイベントのお手伝いも行っている。活動を通してあらゆる人と関わり、自身の成長を感じることができる。看護に興味がある学生はぜひ活動に参加してみてはどうだろうか。

地域の声

今回のヒアリングではビバシティ平和堂　企画マネージャー杉江敏樹さんからお言葉を頂いている。今回のイベントに関して杉江さんから「今、平和堂は「地域社会の課題」の解決とグループの成長が両立することを目指し、当社の事業活動の中で地域の皆様にさらに貢献できることについて様々な取組みを進めています。これは未来看護塾のみなさんの活動とも共通することが多く、子育てや高齢者のみなさんが心身共に健康であるために、心からお楽しみいただけるイベント等の実施にも注力していきます。そのひとつとして未来看護塾さんの活動はとてもありがたいイベントとして感謝しております。」と述べられている。また今後もビバシティでのイベントを予定しており、地域貢献を続けていきたい。

ちょっと聞いてよ！活動自慢

①老若男女のかかわり

未来看護塾の活動に参加すると、老若男女問わず様々な方とかかわることができる。兄弟や祖父母と暮らしていない人でも小さい子どもや、年配の方とかかわることができ、接し方を学ぶことができる。特に、ご年配の方とお話しすることはその方の人生について知り、教養を増やすことができる。また活動を通して、興味のなかった分野に興味を持ったり、自分の興味がある分野を再度認識でき、将来の仕事を決めるきっかけにもなる。大学生活以上の人とかかわる機会をもつことで、自分の視野を広げることが可能となる。

②特技の習得

未来看護塾の活動に参加すると技術を習得することが可能となる。例えば、ハンドマッサージ、ハンドベル、バルーンアートなどが挙げられる。12月に開催したビバシティ彦根でのイベントではその中のハンドベルとバルーンアートを実施した。全員が初心者であったにもかかわらず練習を重ね、見事に成功させた。特に、バルーンアートは子どもに大変人気なブースとなり、約350個のバルーンアート作品を1日で作りきった。このように活動に参加することによって誰かを笑顔にできる特技を習得することが可能となる。是非、多くの学生に参加してもらいたい。

1年間の成果と課題

この1年間の活動では、感染症の影響に左右され、思い通りにいかないことが多かった。看護にとって「触れること」は大切なコミュニケーション方法の1つであるが、感染対策という観点から直接的な触れ合いが難しく、イベントを企画する際は苦戦した。しかし、学内イベントやビバシティ彦根でのイベント、城南小学校やNPO法人ぽぽハウスでのボランティア活動など、感染対策を徹底しながら、今自分たちにできることを探して活動できた。この1年間の課題は、毎月のボランティア活動への参加者が少ないことや、活動意欲に差があることだ。今後、参加者が増えるよう声をかけ、より活気のある団体にしていきたい。

とよさらだ新聞

2022 年 3 月 31 日
発行

とよさらだプロジェクトとは

とよさらだプロジェクトは、滋賀県犬上郡豊郷町の耕作放棄地を活用し、地域の方にご指導をいただきながら、露地とビニールハウスにて野菜の栽培を行っています。年間を通して様々な野菜を栽培しており、普段なかなかできない農作業を地域の方々と交流しながら楽しく活動しています。また、とよさらだでは、現代の農業が抱える問題点に目を向け、地域活性化につなげていく事を目指しています。

オニオンリング！

夏湖風祭にてオニオンリングを出店しました！

昨年は新型コロナウイルスの影響で開催されなかった分、メンバー間での仲も深められました！

売り上げは想像以上で、出店は大成功でした！

たくさんの新入生が加入！

今年度は「とよさらだプロジェクト」にたくさんの新入生が入ってくれました！

元々作業は多くても五人程度だったものが、みんな作業おおよそ倍の十人前後まで増え、さらにに協力してくれて作業がとても楽しく、スムーズに行えるようになりました！

初めてのミカン！

昨年に植えたミカンに実がつきました！

まだ一年目であるため実も小さく、樹自体も小さいので、今後どこまで成長していくのか楽しみです！

活動の振り返り

今年度は昨年度とは違い、おおよそ一年通して活動を複数人で行うことができた。特に春から夏にかけては作業の参加人数が多く、活発に活動を行うことができた。

今後については、。新型コロナウイルス次第ではあるが、地域でのイベントなどに呼んでいただける機会があれば、積極的に参加したい。

地域の声

今年の前半は活動の参加人数が増えているようで良かった。大学生が農業に興味を持ってくれていることはうれしい。若い世代に農業を広げるように頑張って欲しい。平日にも畑に来られるようになれば、活動の幅が広がるのではないか。

沖島に謎の休憩所現る

緑の物体の真相はいかに

ついに屋根完成か

二〇二二年一一月のとある日、ついに流木ハットに屋根がかかった。屋根を葺くことで、休憩所としての機能がより向上した。

以前から、沖島の人から、「休憩所でゆっくりできるような屋根がほしい」という声があった。そこで、屋根を葺くことで、日陰となる場や雨宿りできる場を創出することを目的とした。

屋根を葺く工程としては、躯体となる流木に葦を葺いて、仕上げに笹を葺いた。なお、笹については、沖島の小学校裏の竹を刈らせていただき、その竹から笹を刈って笹を結った。

屋根葺き作業の様子

葦を葺く際には、茅葺職人の方にアドバイスをいただきながら、雨漏れしない屋根の葺き方にした。

なお、屋根葺き作業は、ワークショップ形式で行うことで、研究室メンバーだけでなく、環境建築デザイン学科の学生とともに活動した。

屋根を葺くことで、沖島の住民の方からは「建築らしくなった」「ここで休憩してみたい」という声をきくことができ、沖島の住民の人にとってRYUBOKU HUT は単なるオブジェのような置物ではなく、使ってみようという気になる建築になった。しかし、まだ常にRYUBOKU HUT が使われているわけではないので、今後は常に使われる滞在のデザインを考えていく必要がある。

茅葺職人さんによる講習の様子

今年度は、沖島の自治会の方のイベントに招いていただき、RYUBOKU HUT とその周辺にイルミネーションを行った。期間限定で、普段とは異なる表情を見せた。

また、沖島の文化祭にも参加し、RYUBOKU HUT 内部には、これまでの三年間の施工過程を展示した。施工過程の写真と説明を吊るす、という展示方法によって、子どもからお年寄りまで楽しんでもらえた。

イルミネーションの様子

2022 年 3 月 31 日発行

Taga-Town-Project

活動報告新聞

3 つの新プロジェクトが発足！

■32 の飲食店＆土産物店に訪問

一般社団法人多賀観光協会からの依頼を受け、共同で多賀大社門前「絵馬通り」の散策マップを新たに作成した。絵馬通り周辺の飲食店と土産物店のみを扱ったものだ。約 1 年間かけて合計 32 店舗に足を運び、取材内容の編集はもちろん、マップのデザインも考えた。

■「ひと」にフォーカス

3 年生オリジナルの取り組みとして、多賀町にゆかりがある方々に取材して記事を書き、発信することを始めた。媒体は TTP のホームページ上にある、広報紙「たがいと（多賀の人を糸でつなぐ）」コーナー。現時点で第 5 回まで続き、第 6 回も近日中に掲載予定。前回のインタビューイーが次回のインタビューイーを指名するリレー方式をとることで、持続性を出した。

■地元企業の社員と交流

彦根市と多賀町の境に本社を構える高速道路整備会社・株式会社中栄のウェブコンテンツ作成に参加した。具体的には、社員の方々を学生ならではの視点で取材し、記事を書いた。現時点で第 2 回まで続き、第 3 回も近日中に掲載予定。取材テーマはどれも TTP が考えた。

■多賀町民からはどんな声？

取材活動を通して、多賀町民の方々から直接、TTP に対する印象を耳にする機会が増えた。とくに、「たがいと」第 5 回として話を伺った建築会社社長の方は「多賀町内の様々な活動団体を束ねる場を作ろうとしている。TTP にも協力してほしい」とおっしゃっていた。

また今後の活動として、多賀町の花「ササユリ」の保護へのお誘いも町役場や農業組合の方からある。ササユリが希少になっていることに加え、それを保護する方々の高齢化が進むからだ。

■課題は新メンバーの獲得

TTP がつねに課題に感じているのは、いかに新メンバー（とくに新入生）を獲得するかということだ。活動紹介はホームページや SNS（Twitter、Instagram、Facebook）で頻繁に発信するものの、フォロワーに学生や若者が少ないことが懸念材料となる。今後は、情報を届けたい相手は誰なのかという視点をもって、発信する内容や方法を考える必要がある。

TTP は 2021 年で活動 18 年目！

■TTP って一体どんな団体？

Taga-Town-Project（通称 TTP）が活動の拠点にするのは、彦根市の近い犬上郡多賀町。活動のモットーは「学生ならではの視点で、多賀の魅力を発見・発信・発想すること」だ。県立大学に近江楽座の制度ができた 2004 年に発足し、2021 年に 18 年目を迎えた。

だが、活動メンバーは減少傾向が続く。現時点で中心的に活動するのは、人間文化学部 3 年次のメンバー3 人（人間関係学科・地域文化学科・国際コミュニケーション学科から 1 人ずつ）で協力し、自分たちができる範囲の中で最大限取り組んできた。2021 年 12 月頃には新たに、新メンバー2 人（ともに環境科学部生物資源管理学科）が加わった。ここ最近の TTP がメインとしてきた活動は、多賀町内での町民向けイベントの企画や運営、写真展の開催、町内の集落「字」をめぐる調査などだ。取り組む内容を毎年、少しずつ変えてきた。

■「ちょっと聞いてよ！」

TTP の特徴は、多賀町民の方々とある程度強いつながりが存在することだ。例えば、多賀の食文化に特化した市民団体「YOBISHI（よびし）」からは、多賀産の米や味噌、野菜などを使ったイベントへの参加や当日の補助を依頼されることがこれまで頻繁にあった。

「YOBISHI」から派生した市民団体『桃原プロジェクト』からも時々声がかかる。人口減少により限界集落となった桃原地区の伝統野菜「桃原ごぼう」の種まきや収穫、草木染め体験イベントのお手伝いを担当した。

「たがいと」の取材の様子

株式会社中栄での取材の様子

発行日　2022年3月31日

廃棄物バスターズ新聞

令和3年度
活動報告号

廃プラ×水資源リサイクルへ「雨水タンク」

当団体は、廃棄プラスチックを材料にしたリサイクルプランターの開発、製造、販売を行ってきました。この活動で、廃棄プラスチックを用いても強度を保つことのできる技術を開発し、リサイクルプランターの製品化に成功しました。

そして四年前に、この技術を用いて新たに廃棄プラスチックから雨水タンクを作るプロジェクトを開始しました。雨水タンクは、雨水を貯めておき、災害時に水はトイレなどの生活用水として使用できます。そして、大雨の時は一時的な治水機能を有することから「分散型ダム」と

雨水タンクを通してプラスチック循環型社会の実現に貢献していきたいと考えています。

◆製品化を目指して

昨年度では、実物大の試作を行いました。廃プラを溶かす温度が低かったため内側に成形不良がみられました。そこで今年度は、廃プラを溶かす温度・時間を変更し、試作を行いました。

地域の方にモニターとして使用頂くことを希望しましたところ、モニターとしてあしたのくらしを期待する方々から高まっています。

～環境を考えて～

ポイ捨て禁止看板によるゴミの推移

琵琶湖放送の方々と湖岸緑地大藪、松原水泳場、南三ツ谷公園にて清掃活動を行いました。この活動では、それぞれに昨年度から設置されたポイ捨て禁止の看板の付近とそれ以外の場所でのゴミの量を調査しました。また、ゴミを拾う際は、調査カードを用い、どんな材質・形状のゴミが多いかについても調査しました。

調査の結果、看板付近のゴミはそれ以外の場所と比べて3割ほど減少しました。また、プラスチックゴミが最も多く、中でも、飲食用の容器やポリ袋が目立ちました。

活動を通して、ゴミの回収やリサイクルの必要性を改めて実感しました。

設置された看板

～ゴミ問題への取り組み～

しがローカルSDGs研究会への参加

プラスチックごみ問題の現状に関する理解をひろめるため、しがローカルSDGs研究会に参加しました。

ここでは、マイクロプラスチックを題材とした映画を鑑賞し、その後、学生の方々が中心となり企業や一般の方々に対し、マイクロプラスチックについての現状や課題について議論を行いました。

参加者の学生の方々

その他の活動

◆彦根キレイ隊参加

彦根駅周辺の美化活動をされている彦根キレイ隊の方々と彦根市周辺のゴミ拾いや彦根駅前にある花壇の手入れを行いました。

花壇の植え替え作業

◆ペットボトルキャップ収集

NPOポポハウスの方々に集めていただいたペットボトルキャップを受け取りました。コロナ渦により今回は2年分の量となり、現在4万個ほどのペットボトルキャップを収集しております。

◆広報活動

琵琶湖放送にて当団体の海と日本プロジェクトでの活動を紹介する動画を作成・放送していただきました。

ご当地キャラ博2021オンラインにて当団体が作成した紹介動画がYouTubeで放送されました。

三井アウトレットパーク滋賀竜王にて、普段の活動の説明や雨水タンクの展示を行うなどの宣伝を行いました。

これらの活動を通して一人でも多くの方に当団体の活動を認知していただきたいと考えております。

今後の展望

今後は、地域の方にモニターとして使用頂くことを考えており、雨水タンク実用化を目指します。

また、実習船「はっさか」を用い、琵琶湖に浮遊するマイクロプラスチックの回収を行う予定です。

その他の活動についても、積極的に参加、発展させていこうと考えています。

廃棄物バスターズ　代表　岩井柊太　副代表　寺倉啓悟　　制作　中尾和樹、羽田野歩美

竹林 GAKU

発行日：2022 年 3 月 31 日

竹林 GAKU とは

竹林 GAKU では、滋賀県立大学の目の前を流れる一級河川犬上川の竹林を中心に、放置竹林の整備と活用を行っています。
地域の方や同じ近江楽座の団体といろんなイベントにも取り組んでいます。

ヨシフェス

←竹林 GAKU で作った竹のキャンドルホルダーにあかりんちゅのキャンドルを入れ、その上に地元の小学生が作ったヨシの作品を被せている。

11 月 17 日に近江八幡市円山町の第 1 回ヨシフェスを行いました。今年度に初めて行われるイベントということもあり、イベントの計画段階から大きく関わることができました。同じ近江楽座の「あかりんちゅと」協力し、イベントを盛り上げることができたと思います。来年度も竹とヨシを活かすことのできるイベントにしたいと思います。

地域の声

●ヨシや竹で作ったランプシェードをキャンドルで灯して生まれる“煌めき”と、ヨシと竹で作られた琵琶湖よし笛が奏でる“音色”で、多くのお客様を癒すことができたと感じています。
（まるやまの自然と文化を守る会）

●竹林が綺麗になって、車に竹が当たりにくくなった。（竹林整備で声をかけてくださる地域の方）

●竹あかりを家に飾ってみたい。
（たがの たべるの よびし市の訪問者さん）

プロジェクト自慢

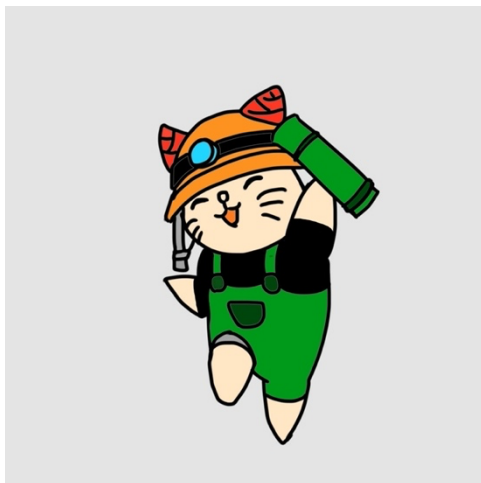
竹林 GAKU では、竹林整備や竹製作以外に、拠点整備として滋賀県立大学の掃除を行っています。主に拠点としているエコキャンパスセンター付近の清掃を行っています。今後も皆さんが馴染みやすい拠点にするべく、清掃を行っていきます。

竹林整備で、彦根市清掃センターと協力し、無償で集めたゴミの回収を行なっているので、清掃意欲はかなり高いと思っています。

成果と課題

大学の OB・OG の紹介で展示会など、竹林整備以外の活動を実施することができた。今年度は、新型コロナウイルスの影響でワークショップが開催できなかったため、来年度は感染症対策を練り、実施したい。

竹林整備についても、関係団体さんから教わったノウハウを活かし、地域の方に親しみをもっていただける竹林にしていきたい。



竹林 GAKU マスコットキャラクター　竹にゃん

たけともだより

特別号
2022年3月31日
発行
文責：寺本 圭吾

東日本大震災から11年…
気仙沼の現在（い ま）

震災から今年で丁度十一年だ。この節目となる二〇二二年は、3月11日までの一週間を震災追悼ウィークとして、連日、東日本大震災の報道で持ちきりであった。

竹の会所跡地近くにある、旧気仙沼向洋高校も、連日報道の渦中にあった。この建物は、現在「東日本大震災遺構・伝承館」として、当時の震災の爪痕をできる限り保存して展示している。

当時竹の会所建設に訪れた学生が、気仙沼向洋高校の写真を撮っていた。この一枚は悲惨だった過去を全て物語っている。

2011年9月に学生が撮影した気仙沼向洋高校

この写真はブックレット冒頭のページにも掲載しており、この光景を学生が目の当たりにしたことから、「地域のひとのために自分たちに何ができるか。」という問いを十年掲げ、このプロジェクトは続いてきた。言わば、原点である。

伝承館は、そのような当時の光景を出来る限り後世に伝えるために残っており、現在活動する学生たちにもこの原点を教えてくれた。私たちも、この活動を後世に伝えるためにブックレットをつくらなければならない。私たちがしてきたことは、きっと明るいミライにつながっている…そう信じている。

絶賛により増版！

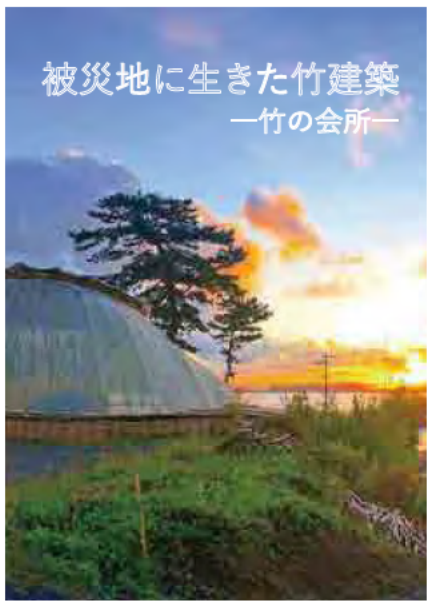
「被災地に生きた竹建築」

2019年に、竹の会所は学生の手で丁寧に解体された。解体する際に、竹の会所に関わった方から言っていただいた、「建築は無くなっても私たちの繋がりはこれからも続いていく」という言葉に胸を打たれた私たちは、その言葉を形にして残したいと考え、活動の軌跡を本にまとめることにした。この活動を通して学んだことを後世に伝えるために、またこの場所で起こった多くのものがたりをたくさんの方に知ってもらうために、本を出版する。

「たけともミライ」の活動目的は、住民同士が復興や生活について議論したり、教育・子育てを助け合ったりなど、生活に不可欠なコミュニティを再生、存続させる場をつくる手助けをすることである。これは行政や企業で優先的な支援を行うのが困難な問題で、その仕組みづくりのためのワークショップ運営と、竹の会所の維持管理が本プロジェクトの主な活動であった。

この活動は"被災地の心の復興"に尽力した数少ない活動の1つである。コミュニティを再生し伝承するために行ってきた活動内容を後世に残すことで、今後同じような困難が起きたときに失われるコミュニティの数が減少することを目的として、これまでの10年間を一冊の本にまとめている。

このブックレットは竹の会所に関わった人たち、また知らない人たちにもこの活動を伝えていくため、今年も修正を加え、増刷することとなった。



被災地に生きた竹建築　―竹の会所―

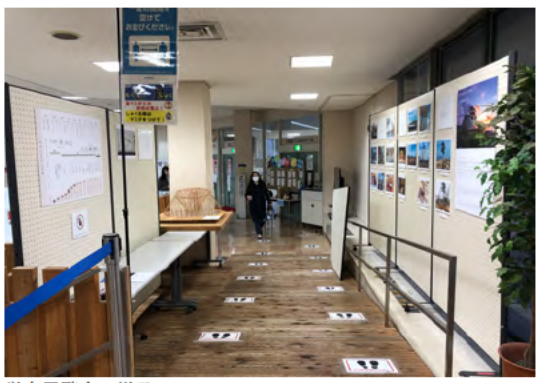
会所ちゃん
竹の会所のイメージキャラクター

この活動を繋いでいくために…　十一年間の集大成
「竹の会所のものがたり展」

本活動のまとめとして、この竹の会所が建てられるきっかけから、建設、そして建てられてから、どのようにつかわれて、どう解体されていったのかという活動を伝えていくために、展示会を開催し、より多くの学生たちに知ってもらう機会をつくった。今回は、見てもらう対象を滋賀県立大学に所属する学生、職員、滋賀県立美術館へ訪れた人および4月に入学する新入生に設定し、竹の会所にまつわる「ものがたり」を知ってもらう。本活動の展示場所は滋賀県立大学内のカフェテリア(2021年11月中に展示は終了した)と滋賀県立美術館での展示を計画した。

学内の展覧会では、昨年度作成したブックレットで用いた写真をもとに、「もの・こと・ひと」の3つの観点から選んだ写真をパネル化した。また、これまでの活動を時系列順に、一目で伝えるため、2011年に学生の中で発足した「たけとも」、および「たけともミライ」の活動年表を作成、編集した。

前述した作成物をパネル化、展示した。併せて、昨年度作成したブックレットを閲覧用に展示すると共に、建設当時の先輩方によって作成された竹の会所の軸組模型を修復し、展示した。学生及び職員が食堂を利用する際に道に沿ってコンテンツが分けられており、竹の会所の活動を知っていもらういい機会だった。


学内展覧会の様子

滋賀県立美術館での展示は学内展覧会を踏まえて今年卒業する学生を最後に、実際に竹の会所で活動したことのある学生がほとんどいなくなるため、新入生へ向けて、活動について伝える役目をこの展示会に託す意味合いも込めた。

竹の会所のものがたり展　ポスター
2022年3月19日～4月17日まで展示している。

竹の会所のものがたりを、「考える」、「つくる」、「つかう」「まもる」、「もどす」の5つのフェーズに分け、それぞれのフェーズで起きた出来事を写真や言葉、模型、そして、当時使用されたもの（スケッチブックや施工時の工程表）を展示した。また、室内での展示に併せて、中庭を用いて、竹の会所に実際に使用されたサンプル材や、実際の大きさで一部竹の会所の躯体を、新しい竹で立ち上げて、よりリアリティをもって竹の会所を伝える材料とした。

また、会期中は、週末に監視員をつけ、観覧客に解説できるようにしており、美術館を訪れた人に、当時の思いや記憶をともに共有できる内容になっている。この活動は今年で区切りを迎えるが、最後にこのような展覧会を開くことで後世にもこの活動を語り継ぐ一つのきっかけになることを期待している。

滋賀県立美術館での屋外展覧会の様子

滋賀県立美術館での屋内展覧会の様子

座・沖島

近江楽座

発行日
2022 年 3 月 31 日

プロジェクト紹介

本プロジェクトは「まなぶ・まじわる・ささえる」を目標に活動している。

主に、島民にどんな活動をしてほしいか、私たちに協力できることがあるかをヒアリングして、より沖島に根差した活動を目指している。

お祭りや小学校行事などのお手伝いや、座・沖島が主体となっておこなった写真展などの活動を通して、メンバーが沖島について理解を深め、沖島の活性化の方法を島民と探っている。

今年度は、コロナの影響から主に畑作業中心に活動を行った。畑作業の内容としては、雑草取り、水・肥料やり、水路づくりなどである。特に力を入れたのは水路づくりで、山側から水が湧き出てきて土がぐちょぐちょになっていたものを溝を掘り、畑に水が流れないように仕切りを作った。

また、今年度の新しい活動として試作会を行った。畑で獲れた青パパイヤをカレーと福神漬けにした。

今後も試作会を行いつつ、どのような食べ方が良いか研究していきたいと思う。

最後に、今年度はお祭りがなく、行事に参加できなかったので、来年度は行事ごとに参加していきたいと考えている。

写真１． 沖島の海辺の写真

写真２．
試作会で作ったカレーの写真

座・沖島
チームのビックニュース

其の一

～ 試作会での出来事 ～

試作会でカレーと福神漬けを作ったと記述しているが、実は計画ではもう一つ料理を作ろうとしていた。その料理とは、コンポート。コンポートは果実を水や水砂糖水で煮て作るヨーロッパの伝統的な果実の保存方法で、ヨーグルトなどに添えて食べると美味しい。

その調理中にレンジで加熱する工程が必要なのだが、レシピどうりにレンジに入れると、できたときに焦げ臭い匂いがして、水分が完全に飛んで失敗してしまった。

この失敗とカレーや福神漬けを作った時に思った改善点を生かして、次の試作会の時にはさらに美味しい料理を目指していきたい。

其の二

～ 沖島ｄの木 発見 ～

沖島で地域の方との交流の一環で山登りをしに行ったとき、小文字の「ｄ」の形をした木を地域の方に紹介されました。

なぜこのような形になったのか不明ではありますが、大きさは人の背よりも大きな木です。とても不思議な木なので興味がある方は是非見に行きましょう。

其の三

～ カメラ好きの方は・・・ ～

沖島にはいい写真が撮れるスポットがいっぱいあります。この新聞を書いている私自身カメラが好きで沖島にカメラを持っていってシャッターを切ります。また、沖島の魅了として空が広いのと湖がきれいというのがあるのでその景色をカメラで撮れるのは最高です。あと、猫もいます！沖島で猫に出会えたらシャッターチャンスです。なので、カメラ好きの方は・・・

ちょっと聞いてよ！
プロジェクト自慢

プロジェクト自慢というか、プロジェクトの活動時に取った写真をインスタグラムと twitter で投稿していて、とてもフォトジェニックな写真が上がっているのでそれががちょっとした自慢です！
インスタグラム：za_okishima
Twitter: @za_okishima

地域の声

昨年度から、耕作放棄地を再利用するために整備していただきました。
荒れ果てた地を整備するのは並大抵なことではないですが、天候に左右されながらも少人数でコツコツと頑張り、昨年はパパイヤの実をたくさん収穫する事ができたことを有り難く思います。

一年間活動した成果と課題

一年間活動した成果としては、畑作業でパパイヤが生ったことと水路づくりで排水の効果があったことです。
課題としては、活動に参加する学生が少なかったことです。なので、これから広報を行い参加する学生を増やしていきたいです。

製作者　座・沖島　宮崎

2022年3月31日発行

おとくら新聞

ビックニュース！

今年おとくらは夏湖風祭に歴史上初めて出店しました！！

おとくらプロジェクトってなあに？

おとくらプロジェクトは、「ギャラリー喫茶おとくら」を 活動の中心として地域活動への参加、イベントの開催などに よって高宮の地域活性化を目的としている団体である。喫茶 運営が主な活動内容であり、シフト制でおとくらのメンバー がスタッフとして入っている。組織はイベント班、ギャラリ ー班、メニュー班、広報班に分かれている。それぞれイベン トの企画・実行、毎月作家さんが変わるギャラリースペース での展示、新メニューの考案、おとくら通信の発行や情報発信を行っている。

成果と課題

今年度は１回生が新たに加わりプロジェクトが活気づいた。6月にはおとくらの歴史上初となる夏の湖風祭に出店する事が出来、１回生と2回生は初めての飲食の提供を行うことが出来た。また高宮歴史研究会と合同で活動も行えた。しかしながら後半は新型コロナウィルスの感染拡大の影響で思うように活動が出来ず、多くのメンバーが抜けてしまうということもあった。また、その中で先輩からの引き継ぎが行われ、喫茶営業を経験したことの無い者のみでプロジェクトを動かしいて行くということになり、不安な部分が多く見られた。おとくらのシフトに入れるものが限られ、月に2回入るものや、1人のシフトが多くなった。メンバー全員が当事者意識をしっかり持ち、プロジェクトに貢献する事が大切である。そんな状況を抜け出すべく県に営業再開許可申請を行い、許可が降りた。とりあえずプロジェクトとしてメインの活動が再開できる目処が立ったことは大きい。

様々な人々の助けを借りて活動できていることを身に染みて感じた1年だった。この借りを喫茶営業で返していく必要がある。

地域の声

「今年もコロナ禍なかなか大変でかわいいそうな一年でした。でも夏湖風が開催され準備から本番へ久しぶりに本来の活動が見らたようで、嬉しかったです。昨年の卒業式前に１０周年記念誌が完成　送る言葉に添えらて　みんな喜んで大きく羽ばたいて行きました。いつもながら寂しい限りでした。

知事さんからの記念誌への礼状は、励みたとなり、また広報ひこね10月号に取り上げてもいただき『継続は力なり』やと　改めて実感しました。

君達の活動はSDG s実践の先駆者です。高宮に新しい風を吹かし　古民家を生かし　高宮の文化を知り、みなさんあってのおとくら、いっぱいおとくら で楽しんでください。これからもよろしくお願いします。」とおとくらの家主である加藤さんからコメントを頂きました。

ちょっと聞いてよ！おとくら自慢

おとくらの自慢はなんと言ってもメンバーの個性である。おとくらは毎週土日に基本的に2名のおとくらメンバーがシフトに入るようになっている。10時から17時の7時間のシフトで様々な話をするので盛り上がり、よりメンバーと仲良くなれる。そのためおとくらは縦と横のつながりがとても強いといえる。また家主の加藤さんを通して地域の人とも交流ができるため、人脈がとても広くなる。

OHMI-RAKUZA
滋賀県大生き物研究会
2022 年 3 月 31 日発行

プロジェクト内容

今年度は「神上沼での生物調査と外来種の駆除」、「環濠での駆除活動」、「滋賀県内の生物調査」の 三つを主に行った。この他に神上沼での清掃活動や夏湖風祭への出展も行った。

神上沼での活動はたも網や投網を使って行った。捕獲した生物を記録し、在来種は放流、外来種は駆除をすることで外来種の生態系への影響の軽減を図る。

環濠での駆除活動は環濠内に生息する外来種を対象に行った。投網や刺し網、たも網、カニカゴ、もんどりなど色々な道具を用いて行った。

滋賀県内の生物調査は大学周辺の河川や水路の他、湖北や湖西の水域で主に魚類を対象として行った。

チームのビッグニュース！

環濠は外来種の一大繁殖地か!?

滋賀県立大学内にある環濠には色々な生物が生息している。在来種はもちろん外来種も生息している。外来種の中でも特にウシガエルは個体数が多く、夏ごろには幼生がそこかしこに居るといった状態である。

こうしたことを受け本団体は環濠でウシガエルの駆除を実施した。大量のウシガエルを駆除したが、依然として多くのウシガエルが残っている。環濠の外来種が周辺環境へ与える影響は不明であるが、全く無いとは言えず今後も駆除が必要である。

捕獲したウシガエル幼生

活動の成果と課題

神上沼での事業は外来魚の繁殖期に事業が実施できなかったことが悔やまれる。昨年度もほぼ同時期に事業が実施できておらず、2年連続で繁殖期の駆除をしていないことになる。今年度の外来種の駆除個体数は 56 個体であり例年より少なかった。

環濠での駆除活動では外来魚を 25 個体、ウシガエル(幼生)を 200 個体以上駆除した。今回の駆除でウシガエルの捕獲でカニカゴが最も効率的であることが分かった。また外来魚は環濠に掛かる橋の下に隠れると捕獲が困難であり、その対策を今後練る必要がある。

滋賀県内の生物調査は全 14 地点 36 種を採取・記録した。記録は公開可能な情報を選定する等して冊子のような物を作成予定であったが年度内での作成はできなかった。

感染拡大の防止のため思うようには事業を実施できなかった。地域で開催予定だったイベントも中止となり地域住民との交流もほとんど無かった。

環濠での駆除活動の様子

地域の声

開催予定だった釣り大会担当者の門野様に「来年度もまた機会があればイベントに参加してほしい」との旨を伺いました。こうした地域住民との交流の機会は貴重であり、私達生き物研究会にとっても良い経験になります。自分たちの経験のためにもこうした声には答えていきたいと思います。

ちょっときいてよ！ 自慢プロジェクト

今年は湖北の河川にも生物調査に行きました。採取した生物は大学付近でも確認できる生物でしたが、河川環境が異なりいつもとは違う雰囲気で調査を楽しめました。

湖北で捕獲したハス

SNS などで情報発信中！

新入生向け情報 LINE 公式アカウント	Twitter	Instagram	活動ブログ 外来魚ひとりがたり
QR コードから友達追加↑	QR コードからフォロー↑	QR コードからフォロー↑	QR コードからアクセス→ または「外来魚ひとりがたり」🔎

2022.3.11 活動報告新聞

田の浦ファンクラブ
学生サポートチーム

11 年目の思いをのせて

『田の浦ファンクラブ通信』は、当団体と交流のある「田の浦」の皆さんに向けて、不定期で送付しているお便りです。この活動は、田の浦の皆さんとの繋がりの維持を目的としています。

当団体はこれまで、田の浦の皆さんとの交流やイベントを主軸として活動してきました。ところが、コロナの影響で、田の浦の皆さんに接触できなくなり、これまでの活動がほとんどできなくなりました。そんな中、何かできないかと団体内で話合いを重ね、誕生したのが『田の浦ファンクラブ通信』でした。

現在は、毎号、四季に応じた特集を組み、活動紹介や、メンバーが最近はまっているものなど幅広い世代の方に楽しんでいただけるように意識して、作成しています。

未だ、新型コロナウイルスの影響で、田の浦の皆さんとの接触が困難な状況が続いていますが、私たちは、これからも田の浦の皆さんへの11年目の思いをのせて、『田の浦ファンクラブ通信』の活動を継続していきます。

田の浦ファンクラブ通信　10 月号

田の浦ファンクラブ通信　11 月号

田の浦 ファンクラブ 通信

すごろくで楽しく防災

メンバーのもりさく、いけちゃんが6月28日にNHK大津の「しが！！防災応援WEB」の収録に参加しました。そこで、「大阪防災プロジェクト」さんと共同開発した『琵琶湖一周防災ゲーム』を紹介しました。「子供に楽しく防災知識を学んでもらいたい」。そんな思いから誕生した『琵琶湖一周防災ゲーム』は滋賀県を舞台にしたすごろくで、実際に災害遺構を見てまわり、聴き取りをしながら作成しました。災害をテーマにした様々な問題がちりばめられており、問題に答えてポイントを集めながら琵琶湖一周を目指します。遊び感覚で楽しみながら防災知識を学ぶことができます。

↑琵琶湖一周防災ゲーム

「田の浦」ってどこにある？

田の浦は宮城県南三陸町の海沿いにある人口200未満の小さな町です。県大から、約900ｋｍ離れていて、車だと片道で約13時間かかります。昔から、漁業が盛んで、ワカメやホヤ、ホタテの養殖や沿岸漁業が主に行われています。

東日本大震災では、高さ約15ｍの津波が押し寄せ、死者4名、行方不明者3名、55戸の家が被災するという重大な被害を受けました。

↑田の浦の様子

地域からの声

今年度は、田の浦に訪問する際、いつもお世話になっている田の浦契約会会長、佐藤功一さんから次のようなお言葉をいただきました。「[前略]東日本大震災から十一年もなる事から、地元の住民達も当時の被災した体験がうすれてきている気がします。震災の悲惨さを忘れない、又、次の世代に伝えていく為にも滋賀の学生達との交流をつづけていければと思っています。どうか月日が過ぎても後輩の学生達にこの震災の悲惨さを伝え、この地震列島でいずれ起こると言われている南海トラフ地殻地震にも充分に対応できる備えに対しても、お役にたつ事もあるかと思います。[後略]」。震災から11年。震災を経験された方々も震災当時の記憶が薄れてきていることを実感されています。そのため、震災の記憶を次の世代につなげていくことが大切です。私たちは、田の浦の皆さんに教えていただいた教訓を、次起こるかもしれない災害の備えに活かすために、これからも防災啓発活動を推進していきます。

活動の反省と課題

当団体はこれまで、田の浦の皆さんとの交流や対面のイベントを主軸として活動してきました。ですが、コロナの影響で、2年前から現地の皆さんとの接触が困難となり、団体が創立して以来の窮地に立たされました。そんな中、滋賀から田の浦へ、滋賀から滋賀へできることはないかと話し合いを重ね、「田の浦ファンクラブ通信」など、活動を形として残すことができました。協力してくださった方々には心の底から感謝しています。来年こそは、対面のイベントを再開させ、防災啓発を主軸とした活動に尽力していきます。

いつ起きるかわからない災害に備えるために、私たちは活動していきます。

地域博物館新聞

2022年3月31日

米原奥伊吹展示事業 進行中

事業はラストスパートへ

当プロジェクトでは，米原市の旧東草野小中学校の空き教室を改装した展示事業を行っている。主な活動内容は，展示室の設計と東草野の山村景観のジオラマ作りだ。

展示室の設計について，実際に旧東草野草野小中学校を訪れ，改装予定の教室の広さ，高さ，黒板など物品の大きさを計測し，元々教室にあったものを活用した展示室作りを行っている。米原市教育委員会の方々の力により，展示ケースや展示パネルなど，展示室を充実させるために必要な物品が，次々に空き教室に運ばれている。

山村景観のジオラマ作りについて，カットした木材から木枠を作り，その中に発泡スチロール板を重ねて地形の土台を作った。粘土で発泡スチロールを肉付けし，現在は園芸用のオアシスを用いて緑地部分を作っている。東草野には吉槻，甲賀，曲谷，甲津原という4つの集落があり，それぞれ地形や景観に特色がある。プロジェクトメンバー全員がジオラマ作り初心者であるが，試作の結果を踏まえながらより良い方法を模索し，見事山村景観を再現したジオラマが完成できるよう作業に取り組んでいる。

米原市東草野は重要文化的景観地に登録されており，この展示室は東草野の地域文化財を保存するだけでなく，観光拠点として機能することが期待されている。地域の顔として残り続ける常設展示の制作に携われることは学生の自分たちにとって非常に貴重な経験である。公開予定の期日が迫る中，精一杯事業に取り組んでいきたいと思う。

写真上：ジオラマ制作の様子

プロジェクトの内容

地域にはその土地の特色が表れた文化があり，地域文化財として人々の生活の間で育まれ継承されてきました。地域博物館プロジェクトはこのような地域文化財を地域の方々と共に「地域博物館」という形で保存・有効活用していくことを目的としている。

地域博物館プロジェクトが行っている主な活動は，西川嘉右衛門家の古文書調査，白谷荘歴史民俗博物館の資料調査，奥伊吹展示事業の3つである。西川家調査では，古くからの葦問屋である近江八幡西川嘉右衛門家に保管されている，葦の栽培・流通に関する古文書を解読している。白谷荘歴史民俗博物館調査では，白谷荘歴史民俗博物館に収蔵されている学校教育関連資料を調査・整理し，資料の登録文化財認定を目指している。奥伊吹展示事業では，これまでの活動で収集した米原市東草野の民具を活用し，休校中の旧東草野小中学校の空き教室を改装して展示する企画を進めている。

また，これらの調査・展示事業以外にも，毎年ビバシティ彦根で開催される「博物館夏祭り」への参加や，湖風祭での民具の展示活動・ワークショップも行っている。ただし，これらの活動は現在新型コロナウイルス感染拡大の影響により，ここ数年行えていない状況である。

地域の方からのコメント

今年度においても，新型コロナウイルス感染状況拡大の影響で近江楽座の活動も大変な時期だったと思います。そんな中でも白谷荘歴史民俗博物館の調査・整理・維持・保存に引き続き携わっていただいて感謝します。皆様の活動は地域文化を守っていくことに非常に貢献しています。当館でも一般ボランティアの方を含む皆様方のこれまでの活動が無かったらどのようなことになっていたでしょうか。皆様の活動に引っ張られて歴史民俗博物館として開館できています。琵琶湖西北の地方の小さな博物館が開館しています。

毎年引き続いて活動していただいています。学生の皆様には実感が薄いかもしれませんが，地域文化を守っていくことの基本となっています。現地での活動が地域の特徴ある地方文化を守っているのです。これからも皆様方の熱意と情熱で忘れ去られてゆく地域文化を守っていってください。皆様が頼りです。また，皆様方と共に特徴ある地方の文化財を守り保存して活用することで，地域コミュニティーの活性化に役立てていきたいです。今後とも宜しくお願いします。

白谷荘歴史民俗博物館　川島光男

古文書調査は意外とたいへん!?

当プロジェクトの目玉である古文書調査は意外と難しい。くずし字という，普段我々が使ってる字をくずし，形を省略した字で書かれているため，辞書で調べようにも，まずその字のあたりを付けなければいけないのだ。これが結構難しい。しかし，そんな難しい古文書解読でも，一年続けていれば慣れにより，自然と読めるようになってくるのである。

写真上：古文書調査の様子

ちょっと聞いてよ！
プロジェクト自慢！！

- 活動場所が県内各地に！！
  ⇒近江八幡，高島，米原など滋賀県のあらゆる地域で活動中
- 実物に触れることが出来る！！
  ⇒貴重な古文書・民具に直接触れることが出来る。学芸員志望者におすすめ！

今年度の主な活動

- 西川嘉右衛門家調査（近江八幡市）
- 白谷荘歴史民俗博物館調査（高島市マキノ町）
- 奥伊吹展示事業（米原市東草野）
- 葦刈イベント（近江八幡市）

成果と課題

今年度の当プロジェクトの主な活動は，右の4つである。西川嘉右衛門家調査では葦の流通に関する葉書1200通を解読し，白谷荘歴史民俗博物館調査では資料をジャンル・タイトルごとに分類した。奥伊吹展示事業では展示室の設計とジオラマの作成を行った（記事トップ参照）。葦刈イベントでは，プロジェクトメンバー以外の学生も勧誘して実施を計画したが，イベント前日に大雪が降り，積雪が酷いため残念ながら中止となった。

今年度の課題について，昨年度に引き続きプロジェクトメンバーの参加率が悪かった。これは，学業・アルバイトとの予定が合わない，新型コロナウイルスの感染が怖いといった理由からだと考える。また，古文書調査をもっとしたいという声もあった。来年度はこれらの課題を解消し，メンバー全員が十分活動に参加できていると感じられるよう，指導教員と相談して新しい活動体制を作っていく必要があると考える。

Jesuit House Project

2021

HERITAGE RESTORATION WORKS　Jesuit House 改修プロジェクト

Jesuit House とは

セブ市のバリアン（Parian）地区に位置する Jesuit house 1730 は、1730 年に建設され、フィリピンの中でも歴史的建造物の一つである。元々、Jesuit house はスペイン人のイエズス会の宣教師の住居として使われ、後に中国人キリスト教徒の商人の住居となり、現在の用途としては、建物の一階部分が博物館として利用されている。資材置き場などとしても活用されているが、建物の状態としてはかなり劣化した状態にある。

フィリピンの歴史的建造物の多くは現在、解体される危機に直面している。このことから、私たちはフィリピンの地域の方の意識改善を図るとともに、歴史的建造物の維持保全・活用を目指す。

また、都市部の脆弱な地域コミュニティに対して、Jesuit house を拠点とした取り組みを行うことで地域活動と地域博物館が連携した新たな交流の場を作ることを目標としている。

活動拠点について

■ ボホール島の地震発生による被害

近年、フィリピンでは自然災害の発生件数と被災者数ともに増加傾向にあり、貧困地域の災害リスクに対する脆弱性も高い状況にある。

2013 年 10 月 15 日にフィリピン、ボホール島にて震度 7 以上の大地震が発生した。被災者は 300 万人以上にのぼり、6.6 万軒以上の家屋に半壊・前回の被害が及んだ。

その上、石造の教会の被害は甚大で、ほとんどの教会が全壊・半壊の被害を受けた。

全壊した教会の跡地

全壊した家屋

屋根瓦の破損状況

1 階のギャラリースペース

資材置き場

外壁の亀裂状況

■ Jesuit HOUSE1730 の被災状況

セブ市のバリアン（Parian）地区［ 中国コミュニティ］に位置する Jesuit House1730は 1730 年にイエズス会の住居として建設された、フィリピンに現存する最古の住宅である。母屋の 1 階は博物館として利用されている。屋根構造と粘土瓦は中国の影響を受ける。前述したボホール島地震において、屋根瓦の一部が破損した。それにより、母屋の 1 階部分である博物館にまで雨漏りの影響が見られる。また、外壁には亀裂が入り、今後発生が予想される自然災害による全壊の可能性が高い状態にある。

Jesuit house のこれから

発展途上国のフィリピンでは、都市開発が進んでいる。フィリピンのセブ市は日本人にも人気のリゾート地として有名であり、フィリピンでは首都マニラに次ぐ、第二の都市「メトロポリタン・セブ」として拡大している。しかし、これらの開発は時に地域の歴史やアイデンティティを破壊し、子どもの居場所を奪う。

フィリピンの歴史的建造物の多くは解体される危機に直面しており、去年にはフィリピンで最も古いとされる住居が取り壊された。原因はフィリピン国家に歴史的建造物を保存・活用するという概念が欠如しているからであると考えられる。その上、フィリピンは自然災害が多発する国でありながら、災害への備えは乏しく、過去数度の地震による被害の修復や復興の目途は立っていない。

今後は保存修復分野における技術伝達・人材育成、地域の拠り所としての歴史的建造物の復興の視点からの包括的計画策定といった分野における支援が必要である。

バリヤン地区は中小企業のオフィス街として栄えたが、会社の大規模化やマーケットの一極化により空き地化や空き店舗が増加している。一方で路上生活者も多く、それに伴い治安が悪化している。

この地区には、中国系メスティーソが多く住む。少なくとも 400 年前のスペイン植民地時代には形成されていた。1730 年に建てられた Jesuit House は現在、地区の博物館として利用されているが、その存在はあまり知られることなく、建築資材置き場に博物館が隠れてしまっている。

バリヤン地区では建物が密集し、交通量も多く街路が狭いため、子供が安全に過ごせる場所がない。経済格差が大きく、都市部周辺にはスラムがあり、安定した仕事がない人々や、子供がお酒やタバコ、ドラックに手を染めてしまっている現状がある。

以上のことから、本プロジェクトでは、この伝統的建造物を保全すると共に Jesuit House を含む敷地一体を地域コミュニティの拠点とすることを目指す。そうすることで、歴史価値の継承法と空き地、古い建物の活用法を視覚化することで、地域イメージの回復や歴史ある古建物を有する地区への波及効果が期待でき、維持管理などを地元の人に依頼するなど、新たな雇用を生み出し、子供の正常な生育を期待できると考える。滋賀県立大学としては、フィリピンでの活動拠点とネットワークを得ることができる。また、現地の教育機関を交えることで教育プログラムの発展や、学生の問題意識の国際化が期待できる。

これまでの活動

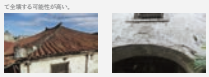
2016.September

伝統的石壁の制作ワークショップ

2015 年：WORKSHOP ON TRADITIONAL CONSTRUCTION SYSTEM OF STONE WALLS

ボホール島の通過の石壁の伝統的な構造システムに関する研究とセックプリ製作を行った。参加大学は滋賀県立大学、三重大学、首都大学東京、サン・カルロス大学、Escuela Taller de Filipinas Foundation, Museo Sugbo Par-lan(フィリピン)、セヴィリヤ大学(スペイン)の 7 大学で行われた。

Jesuit House 1730 は、ボホール島地震において、屋根瓦の一部が破損した。それにより母屋の 1 階部分である博物館部分にまで雨漏りの影響が見られる。また外壁には亀裂が入り、今後発生が予想される自然災害によって全壊する可能性が高い。



2019.December

国際コミュニティワークショップ・地域交流イベン

2019 年：IMMERSION WORKSHOP
URBAN COMMUNITY AND HERITAGE REHABILITATION
①セブ市における大学との共同研究：地域の人に関する調査を行った。Jesuit house の改修と新たなコミュニティについて考えるオープンにおかれ、プレゼンテーション形式で発表を行った。参加大学は滋賀県立大学、芝浦工業大学、ホーチミン大学(ベトナム)、Escuela Taller de Filipinas Foundation, Museo Sugbo Par-lan(フィリピン)の 3 大学で行われた。

②Jesuit House にてイエススパルティーの開催、ストリートチルドレンセンターの子供たちと日本文化の体験、ホームスセンターにて日本料理の調理を行った。
③Immaculada High School of Cebu にて国際文化交流を行った。
参加大学は滋賀県立大学、Escuela Taller de Filipinas Foundation, Museo Sugbo Par-lan(フィリピン)、セヴィリヤ大学(スペイン)の 3 大学で行われた。

スラムにある広場の様子　Jesuit House にてプレゼンテーションの様子　地域の子供たち

ガリヤススパルティー開催　交通の規律を受けた地域の方との交流　Jesuit house にてワークショップの開催

2019.December

水彩画ワークショップ

2019 年～2020 年：EXHIBITION FOR THE BENEFIT OF CHILDREN WITH CANCER

Jesuit house にて水彩画の制作と展示を行った。学生と招いたアーティストによって制作された作品を展示し、販売を行い、これにより得た収入はフィリピンで癌を伴う子供たちに寄付された。

ホームスセンターにて日本料理の調理　各国の文化のプレゼンテーションの様子

2020.December

切り絵ワークショップの開催と展示・ペンダントワークショップの展示

2020 年：PAPER CUTTING WORKSHOP

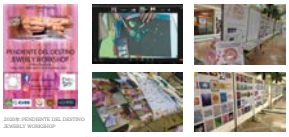
新型コロナウイルス感染症による、病院の外出禁止に不安やストレスに苦しむフィリピンのスラムのための切り絵ワークショップの開催を行った。オンラインワークショップは滋賀県立大学の学生、芝浦のフィリピンのスタッフ、NPO のスタッフと共に進めた。11 月 7 日から 11 月 15 日にかけて行われた。学生から大人まで幅広い年齢層の参加があり、アーツ活動を通じて、

生活しやいることの不安や、人生に対する考え方の変化は等しかったのが手見てこさせる結果 れ。切り絵のワークショップでは

約 40 の参加者に 240 点もの作品が集まり、12 月下旬にこれらの作品を学生でレイアウトを行い、展示場所の調査を行った。

12 月 20 日から 12 月 31 日にかけて、ビバリナ の一階センターにて展示を行った。

切り絵の発注に向けて NPO 法人 Footloose が開催したペンダントワークショップの様子を行った。


2020年：PENDIENTE DEL DESTINO JEWELRY WORKSHOP

Jesuit house にて水彩画の展示・販売

2020.December

Barangay Duljo(フィリピン、セブ市）における火災で焼失した教会の再建プロジェクト

Barangay Duljo
Jesuit House
Chapel
NPO
Footloose
地域の人
Jesuit House
Chapel
NPO
Footloose
地域の人
Jesuit House
Chapel
NPO
Footloose
地域の人

発行日 2022 年 3 月 31 日

①チームのビッグニュース

彦根市長である和田さんにお声がけいただき、滋賀県立大学にてプロジェクトの打合せを行いました！成果物である模型やこれまでの活動資料、再生目標屋課題などを共有し、今後の連携した取り組みができないか議論を行いました！

撮影：川井操准教授

②プロジェクト紹介

彦根市の廃村集落男鬼（おおり）において持続的な集落を再構築していくプロジェクトです。

〇同様の課題を抱える里山集落のモデルケースに

本プロジェクトでは、こうした全国的に問題となっている里山集落の課題解決の一つのモデルケースとなることを目指す。

〇集落の文化や歴史を継承する

男鬼集落は廃村後も民家所有者によって草刈りや家屋の管理に定期的に通われており、集落にある 2 つの神社で開催されるお祭りや自治会長などを取り決める総会も現在も毎年開催されている。一方で、集落に残る家屋は活用方法が見えず、管理困難なことから 2020 年 10 月にお祓いをし自然に朽ちさせていくことに決めたことを所有者を通じて知った。歴史的な空間を持つ集落を里山とともに再生させながら活用していくことを第二の目標に設定する。

③ちょっときいてよ！プロジェクト自慢

二社に取材していただきました！

・京都新聞（11/12）

・滋賀彦根新聞（1/1）

→2022 年新春特大号の表紙に！

現在の取り組みを取材していただきました。特に畑の実践について注目していただきました。

廃村再生！県立大生ら奮闘

彦根・男鬼集落

宿泊などに活用 自ら顧みる場に

京都新聞（2021 年 11 月 12 日）

京都新聞（20221 月 1 日）

④地域の声

畑の開墾した写真を送って―

大久保則雄さん（中学 3 年まで男鬼で居住）

「ワー！スゴイ

貴君と岡崎さんの、パワー、テンションの高さにリスペクトしか有りません」

⑤1 年間を通した成果と課題

無住となっている「男鬼集落」での活動を通じて、再生において集落がかかえる先行きの見えない課題に直面した。しかしながら、信念をもって真摯に集落の課題に向き合い活動を続けていくことでまわりの人々の支援や賛同をしていただき、活動が広がっていくことを学んだ。まだまだ始まったばかりのプロジェクトではあるが、今後も課題と向き合いながらも発展していくことを期待する。

環境科学研究科修士 2 回生　川畑 太輝

半年間、プロジェクトに関わって廃村再生を考えてきた中で、廃村再生とはただ建築を設計するという話だけでは解決できるものではなく、地域の人との関係を気づきあげること、利益を生み出し、廃村を運営していくことの具体的な方法などを考える必要があることがわかった。

環境科学研究科修士 1 回生　岡田 大志

男鬼プロジェクトに携わった半年間で、たくさんの人たちとの出会いがあり、「大学」だけでなく「建築」の枠を越えたコミュニティの広がりを実感した。

男鬼プロジェクトを通して、何かを「実践する」ということは、さまざまな人たちとのつながりが生まれ、その一歩一歩がとても大切であることを学んだ。

環境科学部環境建築デザイン学科 3 回生

澤木 花音

2022年3月31日

近江楽座 お山さんありがとさん

『お山さんありがとさん』って何？

かつての里山は、地域住民が燃料資源を得るために欠かせない場所だった。しかし、高度経済成長を期に、主要な燃料は化石燃料へと置き変わった。これにより、人々は里山を利用しなくなった。

里山が利用されていた頃は、地域住民が日常的に山の管理を行うことで地域固有の豊かな生態系が維持され、農作物に害をもたらす鳥獣（害獣）の生息は低密度に抑えられていた。しかし、人々が山の管理をしなくなった今、生態系のバランスは崩れ、緩衝地帯が無くなり、害獣による被害（獣害）は年々増加している。

「持続的に里山を利用するためにはどうすれば良いのか？」という問いに対し、本団体は地域の特色を全面に表した、その地域だけの里山づくりをすると良いのではないかと考えた。

本団体は里山の利用に関心のある人を増やすこと、また、持続的な里山の利用を考え実行することによって、再び管理された里山を取り戻すことを目的とする。

彦根市南西方面に位置する荒神山の三地点（日夏町方面、石寺町方面、清崎町方面）を対象とし、里山整備活動を行っている。各地点において、目指す方針は異なっている。

プロジェクト紹介

①生物多様性豊かな里山づくり

・実施日：毎月末の日曜日（月一回）
・活動場所：日夏町方面

おうみ木質バイオマス利用研究会（OMBK）に指導してもらいながら、除伐、間伐、林内清掃、植栽を行った。（既存の活動に参加）

②マツタケの生える里山づくり

・実施日：七月三一日、一〇月三十日
・活動場所：石寺町方面

マツタケは栄養の少ない土壌環境を好む。荒神山ファンクラブと共に、アカマツの伐採、下草刈を行った。（既存の活動に参加）

③学生主導で活動する里山

・活動場所：清崎町方面

新規整備予定地である。所有者の方に活動の了解を得ることが出来た。

現在、フィールドは草木が生い茂り、周辺地域では獣害被害が深刻である。フィールドを視察した際には、四頭の猪が獣害用の罠に掛かっていた。

今後、地域住民が望む里山にするために、作業方針を決め、活動を進める予定である。地域住民とともに里山整備を行うことで、学生と地域住民との新たな交流の創出が期待できる。

本活動が持続可能な里山づくりのモデルケースになることを目指す。

ロゴ：お山ちゃん

一年間の活動を通した成果と課題

今年度は本団体初陣の一年である。設立当初は、どの地域でどのような方法で里山整備を行い、利用するのかといった方針が明確に決まっていない状態だった。しかし、学生期間が限られていることや、審査会が年に一度であることから、半ば強引に団体設立に至った。設立申請時の活動計画とは内容が大きく変化したが、今後の活動方針を定めることができた。また、活動を行っていく内に、本団体の活動に共感したメンバーが増え、活動の幅を広げることができた。加入したメンバーのつてや地域の方からのお声掛けによって、荒神山の三地点において、それぞれ別の方針で整備を行っていくことが決まった。地点によって整備の方針を変える理由としては、持続的な里山利用を行うために、地域の特色を全面に表した、地域固有の里山にすることが大切だと感じたためである。現在の里山は、どの地域でもスギなどの一部の木ばかりが生えている。山菜がよく採れる、木の実が多い、昆虫採集がしやすいなど、地域の特色を活かして、地域住民が「こんな山だったらいいのに」と思うような山を実現することで、里山の有用性を感じたり、里山に愛着を持ってもらえるようにしていきたい。

日夏町方面における整備活動では、林内に人が入りやすく、下層まで日の光が差し込みやすい環境を形成することができた。しかし、植栽した木は全て猪に食べられてしまった。活動過程で、OMBKの方にチェーンソーの使用方法を指導していただき、二名の学生がチェーンソーの手入れや扱い方を理解し、枝払いまでできるようになった。今後の課題としては、太い幹の玉切りを行えるようになることである。三月一九日にOMBKと共同で、学生向けのチェーンソー講習会を開催し、練習を積む予定である。

石寺町方面における整備活動では、マツタケの好む環境（＝下草がなく、地面が露出した環境）をつくることができた。今後の課題としては、自然にマツタケ菌が定着しない場合、人為的な導入も検討していく必要がある。

清崎町方面のフィールドは、現在、林内に入ることすらできない状態であるため、林道を整備する必要がある。大まかな作業予定としては「①林道をつくる、②植生調査を行う、③間伐を実行する」である。

今年度は、主に他団体の活動に参加する形で活動を行った。その中で、里山整備に必要な知識や、チェーンソーなどの整備用道具の使用方法を学ぶことができた。来年度からは新規整備予定地の清崎町方面にて、整備方針を定めて本団体主動で活動を行いたい。また、伐採した木については、チップにして販売することが来年

チームのビッグニュース

学生主導で活動できるフィールドが決まりました！

里山整備の担い手不足や獣害被害といった地域問題を抱えている地域「西清崎」と、（既存の活動に参加させてもらうのではなく）学生主導で活動できるフィールドがないという問題抱えていた団体「お山さんありがとさん」をマッチングした。これにより、地域は里山整備の担い手を確保でき，当団体は自由に活動できるフィールドを確保でき、お互いにWin-Winの関係を作ることができた。

団体のメンバーそれぞれが持つ強み（人脈や交渉力、行動力）を最大限に引き出すことで、活動の幅を広げることができた。

ちょっと聞いてよ！ プロジェクト自慢

里山整備だけではない！レクリエーション

①焼き芋大会

日夏町方面での活動では、里山整備以外に、地域の方の畑でさつまいもを掘り、焼き芋大会を実施した。寒い中での里山整備の後に、手作りの暖かい石焼き芋は最高に美味しかった！

②チェンソー講習会

OMBKの方のご協力のもと、チェンソー講習会を開催する。里山整備に欠かせないチェンソーの使用は非常に危険であるため、プロの指導が必要である。

地域の声

OMBKは、2000年度から市民活動として里山の整備と利用を通して循環型社会への提案と実践を行ってきました。その中で、折々に県立大学の学生が多くの活動に参加してくれてきました。

地域に密着した活動で体感することや、多くの他人から受ける多様性など日々の活動を通して多くを学んでもらえてきたなら幸いです。

今後も、学生時代の一過性の活動でなく、地域に根差して課題解決を続けてもらえることを願います。

おうみ木質バイオマス利用研究会
寺尾さま

かみおかべ古民家活用計画
-SLEEPING BEAUTY-

令和3年度のビッグニュース
イベント開催復活！！

1月16日、約2年ぶりに古民家でのイベント開催を復活させることとなった。昨年度は新型コロナウイルス感染症の影響で毎年恒例であったイベント開催を実施することができなかった。今年度も当初は、イベントではなく古民家での地域の歴史展示会のみを開催する予定であったが、地域の方々との交流が減る現状を改善しようと、イベント開催に踏み切った。イベントでは地域の小学校低～中学年の子どもたち10名と共に、正月にちなんだ工作やゲームを行った。牛乳パックで羽子板づくり、厚紙とつまようじでコマづくり、など正月遊びの工作を行い、かるた大会などのゲームも行った。子どもたちはこちらの言うことを大変よく聞いてくれ、水分補給の際の黙飲など感染症対策も徹底したうえでイベントを開催することができた。学生も、子どもたちに工作を教えたり一緒に遊んだりするという中々ない経験をすることができ、反省もあったが得るものも多かった。やはりイベントは地域の方々と交流するうえで大きな役割を果たす。今後もイベント開催を継続し、様々な年代の方々とも交流してきたいと考える。

今年度の成果と課題

今年度は緊急事態宣言などの影響もあり、当初予定していた夏休みを使っての古民家宿泊体験や地域の方々への聞き取り調査を実施することができなかった。そのため地域の方々との交流が思うようにできなかったのが反省点である。しかし、11月以降は地域の清掃に参加させていただいたりイベントを開催したりと、地域の方々との交流を図ることができた。また、彦根城前で開催される「ひこねで朝市」にて定期的にひょうたんの加工品を販売することもでき、地域の魅力発信事業としての一歩を踏み出せたと思う。

今後は、計画の実現可能性も考慮したうえで、何よりも地域のためになる事業を計画していくことが課題である。

地域の方の声～お正月イベント～

1月16日開催のイベント終了後、参加してくれた子どもたちの保護者の方々からは、「（子どもたちが）とても楽しかったと言っています。家に帰ってからも羽つきであそんでいました。」「とても楽しかったと（景品の）炭治郎の切り絵を見せてくれました。また次があれば参加したいと言っていますので楽しみにしています。」「（子どもたちが）喜んで帰ってきました。また機会があれば参加させて下さい。」などなど、嬉しいお声をいただいた。地域の方々との交流の場づくりとして、地域の方々も学生も楽しめるようなイベントを今後も続けていきたい。

【プロジェクト紹介】

かみおかべ古民家活用計画-SLEEPING BEAUTY-は、彦根市上岡部町にある一軒の古民家を拠点に活動し、「地域よし×学生よし×家主よし」をモットーに、地域のための古民家活用を目指している。プロジェクトの柱となる主な事業は、①古民家改修、②ひょうたん加工・販売③古民家での展示会・イベント開催、の3つ。例年は上岡部町内で愛瓢会会長の田中正雄さんご指導のもと、ひょうたん栽培も行っている。

上岡部の宝

上岡部町は人々がとても温かい。地域の方々は初対面の学生たちにも優しく接してくださり、差し入れをいただいたりもする。また、子どもたちと町内ですれ違うと必ず大きな声で挨拶をしてくれる。子どもたち同士も大変仲が良いらしく、学年・性別関係なく公園で一緒に遊んでいる姿を見かける。人々の温かさや子どもたちの仲の良さに触れ、私たち学生も心が浄化される気持ちである。

【写真】左上:正月イベント 左中:地域の清掃 左下:活動拠点の古民家
右上:朝市 右下:正月イベント